



わたしの  
兵籍番号



koberyol

軍隊生活をした者は生き残りの数が年々減少してゆくが、けっして戦争の日々を忘却してしまっただけではない。

戦争を知らない世代が平和でたのしい毎日を謳歌し、満喫する一方で、戦争から帰還した者たちだけが、ただ辛い軍隊生活を送ったのか、と問われれば、けっしてそうではない。軍隊で送った日々は、けっしてマイナスばかりではなかった。

戦争は悲惨で、だれにとっても嫌なものだが、軍隊生活はいろいろな意味で「自分にとって今日までプラスでよかった」と思うし、この「考え」に賛同する人たちもすくなくはないと思われる。

わたしの送った軍隊での生活は、わずか一年たらずであった。しかし、今から考えるなら官費でよくまあ面倒をみていただいた、と感謝してもいるのである。思春期真っ最中の少年が、なかなか体験できるものではなかったか、と今では思っている。

ところでのちになってわたしは軍隊での自分の経歴がどうなっているかを調べたことがある。東京のかつての厚生省の援護局というところに記録が残っていると聞き、だいぶ前になるが、出かけていったことがある。そこで文書を管理する倉庫へと案内され、自分の資料を探すのに半日、かかってしまった。

まず、かつてわたしに割り当てられていた兵籍番号を忘れてしまっていたので膨大な時間がかかってしまったのだ。たよりになるのは甲種飛行練習生だったことと、自分の姓名をたよりに根気よく探索していった。なにしろ電話帳をはるかにしのぐような分量から自分の姓名を探りあてるのである。さすがに途中で不安になってきた。しかし、かならず記録は残されていると自分に言い聞かせ、探し求め、ついに見つけることができたのである。

いわば、わたしの軍隊生活の経歴であり、いつどこで何をしていたかが、時系列に沿って羅列された文書がでてきたのである。

これによると、配属された日にちと場所、階級などが一目瞭然であり、たとえば昭和十九年には、土浦海軍航空隊に入隊し、海軍二等飛行兵を命じられている。さらに同じ年、甲種飛行予科練習生となり、横須賀の海軍通信学校へと派遣修業を命じられる。その後、電信練習生、一等飛行兵、上等飛行兵、飛行兵長となり、通信学校を卒業した。ご丁寧にも卒業成績なども記されており、142人中75番めの成績であり、さほど芳しくない成績までがわかってしまう。そしてわたしは、901空航空隊として美保にむかうのであり、このような記述が、翌年の終戦に日までつづく。そして、経歴の文書の最後には、こう記されていたのである。

「昭和二十年九月一日 任命 海軍二等飛行兵曹 予備役に編入スル」

ここでわかるのは、一年間という短い期間のあいだに二等兵から下士官へと昇進すつといった驚くべき事実である。考えてみてほしい。十七、八歳のイガグリ頭の少年が八月十五日で終戦を迎えるわけだが、終戦日の二週間後、九月の一日に二等飛行兵曹に昇進が予定されていたということなど、驚愕させられるのである。

わたしは宍道湖の901空（航空隊のことである）を除隊して以来、自分自身に自信がもてるようになった。それはおそらく自分の判断基準となるモノサシが軍隊生活のよって涵養されたというか、わたしのその後の生活における大きな柱になったように思えるのだ。どんなに辛いことがあろうと、終戦後の物資の窮乏には悩まされたが、あの軍隊生活に比べればものの数には入らなかった。これから日本を作りなおすのだ、とドン底のなかで希望の炎を燃やしていたのである。

結核に罹り、早稲田実業を一年、落とされたことを先に書いたが、そのころはたるんでいたと思う。結核だった少年が予科練に志願し、なんとすっかり健康になったのだ。軍隊での厳しい生活でわたしは心身ともに改造されたかと思う。人の力のはかり知れないし、いったいどこにこんな力が秘められていたのかと思うくらい、その肉体的・精神的エネルギーが横溢していることに驚くのである。すなわち、人間は甘えてはならないし、平和なだけの生活を送っているだけでは、ナマクラで人間がダメになるという理屈である。

結論的には、「人生を生きる上で矢でも鉄砲でも持ってこい」という意気込みであり、信念である。ちなみにあの当時の望みはといえば、「腹いっぱい飯を食うこと」であった。

人間はどんな仕事に就いてもエキスパートになることができる。「世の中のしくみ」をよく熟考し、自分にもっとも適応する仕事を選ぶことが大切だ。世のため人のために働いたらなんでもできるんだと考えたら希望はどんどんでてくる。こんな平和な日本に感謝し、頑張ろうではありませんか。